

少人数指導・習熟度別指導による研究の成果と課題

少人数指導・習熟度別指導部会では、確かな学力を身につけさせるために部会別のテーマを設定し、指導法の改善に取り組んできた。特にこの2年間は、本校の算数指導システムを生かした授業の質的な改善を最大の目標にした。

ここでは、これまでの研究の成果と課題についてまとめていきたい。

1 研究の成果

(1) 指導計画の工夫について

① 少人数指導の指導計画

学級を二分割した指導をするため「ねらい」「指導内容」「指導方法」などの基本線を統一する必要があった。そこで、単位時間ごとの指導過程が分かるような年間指導計画を作成した。その結果、学級担任と少人数担当が指導すべきことや重点事項を共通理解できるようになり、指導の徹底が図られた。また、児童の準備物等も記してあるので、学級担任が別室（少人数指導教室）で学習する児童への指示を徹底させることができた。

② 習熟度別指導の指導計画

習熟度別指導では、グループの学びの特質に応じた「指導過程」や「指導方法」を工夫して授業を展開していくことが必要である。しかし、少人数指導の場合とは異なり、複数の教師が各グループごとに指導方法を工夫しているために、指導者間の連絡がとりにくいという問題があった。この弊害を改善するために、学年ごと習熟度別にG1～G3に対応する3種類の年間指導計画を作成し、指導の指針とした。これによりグループ担当教師は習熟度の違う他グループの指導も考慮しながら全体像を把握し、それぞれのグループの実態に合わせ修正を加えて指導にあたることができた。

③ スキル学習の指導計画

計算領域に絞りオリジナルプリントを作成し、年間を通じて達成すべき目標を明記したスキル学習年間指導計画に従い取り組ませた。100ます計算を導入したところから児童は集中して学習していたが、目標が明確になったことに加えて問題のバリエーションが多彩になったことから、より意欲的にスキル学習に取り組むようになった。

(2) 指導方法及び指導過程の工夫について

① 児童が主体的に学習に取り組むための課題提示の工夫

児童は興味や関心のある課題には積極的に取り組むので、以前に経験し成功したことのある課題やグループの実態にあった課題を提示するようにした。その際、知的好奇心を刺激し、より学習意欲を引き起こさせるような内容にした。特に低学年では、身近な日常生活から取り入れた課題やストーリー性のある課題などが学習意欲を引き出すには有効であることが分かった。

課題提示の際には、何のために何をめざして学習するのか、学習の目的や目標をできるだけ具体的に示すことにより、学習の心構えができ学習意欲が高めることができた。

② 自力解決に導くための工夫

児童を自力解決の場面で主体的に取り組ませるために、教師の支援のあり方として児童の成功感に訴えた。前述のように目標を明確に示すことで教師の期待する学習行動（評価規準）を明らかにし、机間指導等により、個に応じてうまくできた時にはほめたり認めたりした。また、つまづきが見られた時にはどこまで正しくどこをどのように間違えたのか思考の過程を具体的に検証するようにした。さらに、児童の力より少し高い水準を設定し、「がんばったのでできた」という成功感を繰り返し体験させるように工夫した。

③ 児童の考えを生かした学び合いの工夫

学び合いを成立させるには、自力解決の場で見出した解決方法を自分なりに表現する力を身につけさせることが必要である。どのグループにも自分の考えを大勢の中で発表することに苦手意識をもつ児童がいる。これらの児童には具体物や半具体物を操作させながら発表させたり、図や絵で表したものを説明させたりするなど、それぞれの特質に応じた表現の仕方を工夫した。

また、全体の中で自分の考えを発表させたり問い返させたりするだけでなく、より抵抗感の少ないペア学習やグループ学習に取り組ませるなど、学び合いの場の設定にも工夫した。さらに、教師のコーディネートのもと、みんなで少しずつ解決の糸口を出し合って結論を導き出す過程に参画させることも、これらの児童にとっては、発表の場が確保され満足感を感じさせるものになった。

(3) 評価の工夫について

① 単位時間の評価規準の精選・無理のない評価計画

これにより一時間一時間の授業の目的が明確になった。また、年間指導計画に精選した評価規準と判断基準を入れたことで見通しを持った評価ができるようになった。指導にあたっては、日常の学習状況の把握や単元ごとの習得状況、学年末のC R Tによる定着状況のほか、学びのタイプを押さえることにより、一人一人の特性に応じた学習が展開できるように配慮することができた。

② 「算数のあゆみ」の作成

目標標準評価に基づく「算数のあゆみ」により、学習状況を具体的に児童や保護者に伝えることができた。長期休業前に配布することにより、児童にとっては休業中の学習の目標が明確になり、家庭学習の継続という点で効果的であった。

2 今後の課題

- ・授業の質的な改善へ向けての努力は、一層続けていく必要がある。課題の提示の仕方、自力解決の支援の仕方、学び合いの充実の他、まだまだ工夫できる内容がある。また、操作活動の取り入れ方や数直線図の指導など学校全体として系統的な指導を確立させることも課題である。
- ・C R Tの結果では、どの観点についても全国平均を上回ったが、「数学的な考え方」は他の観点に比較して相対的に低い得点であった。数学的な考え方は、論理的に考えを構築する能力や与えられた資料から類推する能力などによって構成されていることから、国語をはじめとして他教科との関連を図りながら、総合的に育てなければならない。
- ・習熟度別指導に加え選択学習を導入したことは、児童の学習意欲を高めるには効果的だった。今後は、選択学習の時数と学習内容を広げることと児童の選択能力を高めていく必要がある。特に選択能力の育成にあたっては、自己評価力を高め、自らの判断と意志によって学習を最適なものに調整していく力をつけていくことが必要である。
- ・確かな学力を身につけさせるための指導法の追究にあたっては、学校全体として児童の育成に当たるシステムの改善と、個々の授業をよりよくするための質的な改善の両輪で進まなければならない、今後一層研究を進めていく必要がある。